

私のお兄ちゃん
お亀納豆

あんなことしなければ良かった。新しい服を、それも普段の私ならとても着ないような女の子っぽい服を買って、ちよつと調子に乗っていたのだ。

早速袖を通して姿見の前に立つ。うん、悪くない。いやいや、むしろちよつとイケてるかも？　なんて思いながら、くるりと一回転。髪はもつと伸ばした方が良いかも。

本当に何であんなことをしてしまつたんだろう。いつもなら殆ど会話らしい会話もしないのに、そのときの私はお兄ちゃんの部屋へ新しい服を見せに行つてしまつたのだ。

「お兄ちゃん！」

ばたん、と勢い良くドアを開ける。私に背中を向ける格好で机の上に乗せたノートパソコンに視線を注いでいたお兄ちゃんは椅子の上でがたがたと変な動きをすると、凄い勢いでこつちを向いた。ぼさぼさの髪に、実用性重視の大きなレンズの眼鏡。よれよれのシャツはもう何日も洗濯していないだろう。

「なつ、なんだよ……。ノックもしないで急に入ってくるなよ！」

「あ、ごめん。ね、そんなことより見て！　可愛いでしょ？」

そう言って私は部屋に入って、くるりと一回転。

「うるさいなあ、そのどろころが可愛いんだよ！　ブスが何着ても似合うわけないだろ！」

気持ちが一気に冷めた。

「はあ、何それ!?　ちよつとは褒めてくれたって良いじゃん！　もういい、普段からアニメの女の子ばかり見てニヤニヤしてるお兄ちゃんに聞いた私が馬鹿だった」

「ふざけんよ、とつとと出て行け！」

漫画雑誌が飛んできて腕に当たって、私はアニメのポスターやらがいっぱい貼ってある部屋を追い出された。

さつきまでの幸せな気分がまるで嘘だったかのようだ。お兄ちゃんの部屋の中から声が聞こえてくる。

「くつそおおおお、何なんだよアイツはよお！　あんな妹要らねえよお……。ちくしよう、ちくしようおおおお……。！」

それからだ。お兄ちゃんが異常おかしくなってしまったのは。

最近、私の部屋と隣り合っているお兄ちゃんの部屋から話し声が聞こえてくる。友達が遊びに来てるとか、電話をしているとかそういう雰囲気でもないようだった。独り言かと思っただけど、今までお兄ちゃんが独り言を言っているのを聞いたことがない。

直接訊いてみようかと思っただけど、別にうるさいというほどのものでもない、気にしないようにした。

最初は気のせいかと思っただ。

「おーい、真菜ー」

お兄ちゃんが私の名前を、それも機嫌の良い声で呼ぶなんて、もう何年も無かったことだったから。

「何？」

と返事をする、お前なんて呼んでないと言われてしまった。

でも、そういうことが十回以上あって、それは明らかに気のせいなんかじゃなかった。お兄ちゃんは絶対に私を呼んでいるのだ。私がそう主張してもお兄ちゃんは一度も首を縦に振らなかった。

日曜日、部活動を終えて家に帰る途中、商店街を歩いているお兄ちゃんを見付けた。声を掛けようかと思っただが、どうも様子が変だ。

「おいおい、そんなにくつつくなよ……」

誰に向かって話しているんだろう。周りの人達もお兄ちゃんに奇異の視線を向けている。

「え？ 私達、恋人に見えるかなだつて？ おいおい、よせよ……」

何だか照れているようだけど、それは変な目で見られているからじゃない。どこか嬉しそうな笑みを浮かべてさえている。

え、隣に誰か居る……？ 丁度、中学生くらいの背丈の髪の毛長い女の子が……。

眼をごしごしとこすって見直すと誰も居ない。錯覚……？ でも錯覚にしてははつきりと見えた気がする。考えている内に、お兄ちゃんはどこかへ歩き去ってしまった。辺りに居た人達も何事もなかったかのように歩いている。

私はすつきりしない気持ちのまま家に帰った。

月曜からは試合が近かったから練習で家に帰る時間が遅くなる日が続いた。あれは水曜日のことだ。

「お母さーん、晩御飯はー？」

「え、あんた、さつき食べたでしょう」

「は？」

そんな筈はない。私はたったいま、部活を終え帰って来たばかりなのだから。そうお母さんに言うと、

「そうよね。やだ私、ボケてきてるのかしら……」

すぐにお母さんは夕飯を用意してくれた。部活でへとへとだった筈なのに、あまり食欲がわかかなかった。

お母さんのボケはその日だけじゃなかった。三日に一回は私が晩御飯を既に食べたと主張するのだ。ストレスか何かで異常おかしくなっているんじゃないだろうか。鬱々としたことを考えながらお風呂に入ろうとする時、お兄ちゃんが浴室からバタバタと出て来た。

「悪かった！ 入ってるって知らなかったんだ！」

「わっ……」

お兄ちゃんは私に思いつきりぶつかったのに謝りも

しないで自分の部屋へと戻っていった。

誰かお風呂に入ってる？ でもお父さんやお母さんなら、あんなに慌てることはないと思う。

私はそつとお風呂場を覗きこんでみるが、誰も居ない。そりやそうだ。うちにはお父さんとお母さんとお兄ちゃんと私の四人しか住んでないんだから。

だから、女は髪を肩口で切り揃えているお母さんとショートカットの私しか居ないんだから、排水口に漣く長い髪の毛が絡まつている筈がないのだ。

そう、そんなことはある筈がないのだ。

どういうこと？ 私の晩御飯が食べられていたり。つけてもないテレビを消し忘れていると怒られたり。友達が、私とお兄ちゃんが一緒に歩いているところを見たと行ってきたり。

最後にお兄ちゃんと一緒に出かけたのなんて、もう何年も前のことなのに。

そんなことばかりが気になって練習も全然身が入らない。

「ただいま……」

萎んだ声で帰宅の挨拶を済ませると、居間へ行つた。

「え……」

お兄ちゃんがテレビを見ている。それは良い。

でも、その隣に居る髪の毛長い女の子は誰なの。

桜色のワンピースを着ている。それ、この間、私が

買ったやつ……！

「あんた、誰……？」

気持ち悪い。喉がカラカラに乾いている。

お兄ちゃんがゆっくり振りかえる。

「お前こそ誰だよ」

「何言ってるの？ 私だよ、お兄ちゃんの妹の真菜だ

よ！」

お兄ちゃんは心底意味が理解らないといった顔で。

「お前こそ何言ってるんだ？ 俺の妹はここに居る真

菜だけだぞ」

そして隣に座っていた女の子がこちらを見る。

髪こそ長いけど、その顔は十四年間よく見慣れたもの。

私……？

そいつは立ち上がったかと思うと、こちらへ静かに歩みよってきた。柔らかな香水の香りが届いた。私は

香水なんて一度もつけたことない。

私は私の鼻先にまで顔を近づけて、にたあと嫌らしく口の端を釣り上げた。

両手が私の首に絡まる。

「か……お、にい……がつ……ちや……」

ぎりぎりと締めつけられる。

そいつが私の声で言った。

「お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだから」

何か折れるような音を聞いたのを最後に私の意識は闇に沈んだ。

私のお兄ちゃん

初出 『混凝土の隙間と奇譚集 二巻』 2009年5月24日 発表

2010年5月9日 公開

著者 [お亀納豆](#)

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 [ver.T](#)

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。